

＜日本レジャー・レクリエーション学会第41回学会大会
実行委員会セッション報告 於：大分大学＞

レジャー・レクリエーションの意味再考
—いま、私たちに求められるころとは—

パネリスト

上野祥子¹ 江川雅也² 藤本光司³

コメンテーター

佐藤靖典⁴

コーディネーター

谷口勇一⁵

Reconsidering the meaning of leisure and recreation

— What is the mind that we have to respect —

Sachiko Ueno¹, Masaya Egawa², Koji Fujimoto³, Yasunori Sato⁴ and Yuichi Taniguchi⁵

1. はじめに

パネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます大分大学の谷口です。どうぞよろしく申し上げます。パネルディスカッションの中で深めさせていただきますテーマは「レジャー・レクリエーションの意味再考 —九州発いま、私たちに求められる心とは—」という内容でございます。

学会大会全体のコンセプトが、先に起こりました東日本大震災に向けて、レジャー・レクリエーションに、そして本学会に何ができるのかという

ことを深めることにあります。パネルディスカッションの登壇者は、全てが九州の方でございます。九州発、いま私たちに求められる心とは、ということに関してレジャー・レクリエーションを通して深めさせていただこうと思っております。

本日配布した資料の中に、パネルディスカッションに向けた文章を書かせていただいております。少しでも読ませてください。「以前調査で訪問した東北地方のある総合型地域スポーツクラブ関係者とメールでやり取りをしています。数ヶ月にわたる避難所生活も一区切りし、ようやく以前

1 熊本県レクリエーション協会 Kumamoto Recreation Society
2 長崎県南島原市社会福祉協議会 Minamishimabara City Council of Social Welfare
3 福岡市レクリエーション協会 Fukuoka City Recreation Society
4 NPO 法人福岡県レクリエーション協会 NPO Fukuoka Recreation Society
5 大分大学教育福祉学部 Faculty of Education and Welfare Science, Oita University

に近い生活へと戻られつつあります。その方から、被災後のエピソードや感想をたくさん頂戴してきました。中でも特に印象に残っている内容は以下の内容です。『絶望感の極みに触れたとき、私たち人間は希望という言葉の意味を深く噛み締めることになるみたいです。ずっと悪いことが続くわけではない。今度は少しだけかもしれないけど、良いことがあると信じられるようになっていきます』。私の中で、大変強く感銘を受ける内容だったのです。そういったメールでのやり取りの中で、私自身も大学の授業をしばらく休講にして東北に伺わせていただきたいという衝動に駆られることが度々ございました。学会大会をむかえ、我々九州に住んでいる者の中で、東日本大震災に対する想いをしっかりともう1回見つめなおし、そして我々にどんなことが出来るのか、そして我々に求められる心は何なのかについて考えさせていただく時間にしたいと思います。

ここで、レジャーそしてレクリエーションの意味を少しだけ整理しておきたいと思います。まず、レジャーという言葉です。見解が少し異なる解釈をお持ちの先生方もいらっしゃると思いますが、社会学の先生方でいらっしゃる内田隆三先生によれば、「現代日本の場合レジャーは何もしないでのんびりするような休養、くつろぎとは趣が異なり、活動的余暇であり、レジャー産業が提供するサービスや商品を消費するという形式が一般化しています。レジャーの意識としては、生活の中で最も力点をおく対象であり、単なる機能的な休息ではなく、レジャーそのものを楽しむ事に意義があるとする人が多くなっています」というご説明をいただいています。

レクリエーションの定義につきましては、本学会員でもいらっしゃいます立教大学の松尾先生がこういう文章を書かれております。「余暇時間に行われる自発的な活動であり、その活動を目的的に楽しむことを通して、身体的・精神的な満足と生活の充実をもたらす諸活動の総称である。その活動から価値を引き出し、気晴らし・健康増進・生活の質の向上等、生活の活性化や人間性の改革を期待する点に特徴がある。語源は、Re-createであり、Re:再び、create:創る から再創造を意味する」ということなのです。

私は、大分大学でレクリエーション概論という授業を担当しております。その中で、レジャーとレクリエーションとの関係をこんな風に講義をすることがあります。我々の生活の中で、日常と非日常という考え方を当てはめるとするならば、レジャーは日常から非日常への関与を志向した行為・行動なのかもしれない。余暇活動をいかに充実させるかという発想が原点にあり、ヨーロッパ的思考性と言えるだろう。ちなみに、福岡大学でドイツのスポーツ研究の第一人者でいらっしゃる藤井先生とやりとりをする中で、ドイツ語の中いわゆるレクリエーションに相当する単語を見出せないという見解をいただきました。一方でレクリエーションとはこういう言葉なのかもしれませんが。レクリエーションは非日常的活動を経験した後に、日常へと回帰する行為・行動です。その際、日常において自らの活力を増大させ、また自らの再発見といった事柄を期待される場所でもあるでしょう。ですので、Re-createの意味をそこらへんに見出せるのかもしれませんが。つまり、われわれの生活の中にある日常・非日常というものをセットとするならば、レジャーそしてレクリエーションという2つの概念がユニットになっていることが望ましい、ということになりそうですが、特にこのパネルディスカッションにおきましては、レクリエーションという部分で議論を深めさせていただき部分があるかと思います。

ここでパネラー、コメンテーターのご紹介をさせていただきます(写真1)。

皆様方から向かって左側の先生ですが、熊本県レクリエーション協会という所属に今回は



写真1 実行委員会セッション全景

させていただきましたが、上野祥子さんです。上野さんからは、「地域における助け合い（共助）とレクリエーションの役割」という内容を中心に話題提供をいただきたいと思っております。それでは、その右側に座っていらっしゃるのは江川雅也さんです。長崎県の南島原市の社会福祉協議会の職員でいらっしゃいますが、「地域復興・再生と人間力（人間関係力）－雲仙普賢岳被災の経験から－」というサブタイトルをつけさせていただきました。3人目のパネラーです。福岡市レクリエーション協会の藤本光司さんです。藤本さんからは、「いまレクリエーションになにができるのか－福島県への“レク”支援を通して」について話して頂きます。藤本さんは、つい先日、福島県へレクリエーション支援に行かれております。そのお話しを中心に話題提供を行いたいと思いません。最後に私の隣に座っていらっしゃいますコメンテーターですが、NPO法人福岡県レクリエーション協会の佐藤靖典先生です。佐藤先生からは、3名のパネラーからのご発題をうけて、総括的なコメントをいただき、議論の方向性を示唆いただきたいと思っております。佐藤先生は、私のレクリエーションの先生であり師匠です。福岡市の職員をしていた頃の実は上司でもあります。よろしく願いいたします。

それではさっそくパネラーの先生方にご発題いただきたいと思います。

2. いまレクリエーションになにができるのか－福島県への“レク”支援を通して(藤本光司)

福岡市から来ました。一応4年制大学を卒業しましたが、小さい頃からプロゴルファーを目指しておりました。33歳の時に断念しまして、その後福岡市立の特別支援学校で職員をし、障害児教育に関心を持ちました。それから慌てて、通信教育ですが小学校の教員を目指し、障害児教育の先生にもなれたらいいと、学生もしております。

まずこれを見てください（写真2）。福岡空港で頂いた全日空の方々からのメッセージです。

アコーディオンは中古でも30万円します。レクリエーションといっても案外お金がかかります。福島に行く時、アコーディオンを飛行機に乗せるにあたって、ちょっとしたエピソードがあり

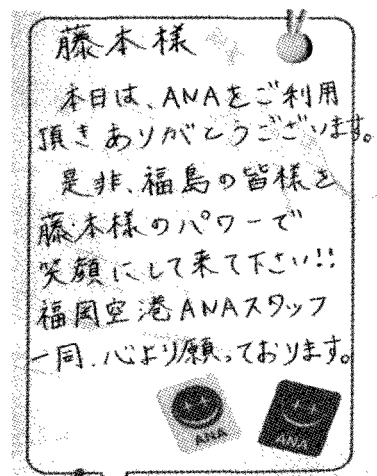


写真2 全日空からの藤本氏へのメッセージ

ました。空港のインフォメーションに電話をし、「アコーディオンを大事に扱ってほしい」とお願いしましたところ、「乗せたくない」と断られました。どうしようかと考え、結果的に安いアコーディオンを宅急便で福島に送ることにしました。全日空の方は、私がアコーディオンを持って、福島にボランティアに行くということを連絡事項ですべて知っていたと思います。ボランティアということをです。

福岡空港には、1週間分の荷物を持って行きました。約27キロありました。7キロの超過でした。金額にして4,000円超過料金を支払いました。そして、私が飛行機に乗ろうと待合室で待っていたところ、向こうから「藤本様～、藤本様～」と探してくるのですね。「何だよ」って思っていたけれど、向こうは「先ほどは大変失礼いたしました」と言うのです。何のことだろうと思っていたら、「ボランティアに行く先の子どもの笑顔を増やす材料を乗せているバックなのに、超過分をいただいてしまい大変申し訳ありませんでした」というお言葉をかけていただきました。そして「先ほど頂いた4,000円はそのままお返しします」とお返しいただきました。

私はそのそういった形でお金を返してもらうことに大変びっくりしました。これは、航空会社からの配慮だと最後に聞かされたのですが、すごくその時に感謝しました。そして私の大きなカードケースにピカチュウの折り紙つきで、このメッ

セージを頂いたのです。飛行機の中では、「頑張ろう！福島」とか、「ここを一つに」という言葉がのったバッジを「子どもたちに使ってください」と言って、客室乗務員の方がくれました。

福島ではまず、福島第1原発から約40キロの、いわき市久乃浜の海岸に視察に行きました。この写真を撮るときに（写真3）、撮ろうか撮るまいかすごく悩みました。その場所は、すぐ100m先が海で、津波によって辺り一面砂利もないのです。私がそこに足を踏み入れるだけで、周りに住んでいる方から丸見えなのです。私が写真を撮っている姿を見て、現地の人はどのように思うだろうという気持ちが湧き起りました。その時、同行していた阪神淡路大震災の被災者である仲間に「東北の方々の気持ちを西日本の方々に見てもらうために、情報として撮って帰ろう。私たちには伝える義務がある」と言われ、撮ることにしました。



写真3 いわき市久乃浜の海岸沿い

郵便ポストは普通赤色ですよ。それが海水で腐食して茶色になっていました（写真4）。そして、これはスーパーマーケットだと思いますが、壁にペンキで絵が描いてありました。これって高さ約4mもあるのです。足場か何かを積んで、わざわざ描いたのでしょう。当然、足場代がかかりますし、塗装代もかかります。そういう費用を負担しても、どこかの誰かが描きに来てくれているのです。ちょっとでもその街の中に残った建物に色を付けて、被災者のために明るくしようという気持ちでしょうね。



写真4 腐食した郵便ポスト



写真5 防波堤の断面図

この防波堤の断面を見て皆さん何か気付かれませんか（写真5）。防波堤の折れた所の断面です。私は建築や設計に少し知識があるのですが、これは手抜き工事です。何故かわかりますか。鉄筋がないのです。15cmほど鉄筋があれば、別に問題はないのですが、これにはまるっきり入りません。当然、津波が来ても支える力はありません。

このデイサービスセンター（写真6）は、こういう震災でもなかったら、デイサービスを利用されているお年寄りの方々が、きれいな海を見ながら生活されるには絶好の場所だったのです。それが今回の津波でとんでもない姿になっていました。私たちが行った復興のお手伝いは、主に廃材の片づけだったのですが、この場所だけは、何故かこのまま残されていました。もうこれを見た瞬間に私たちは何も言えず、もう絶句というか、この写真を撮っている間は、言葉を探す必要などあ

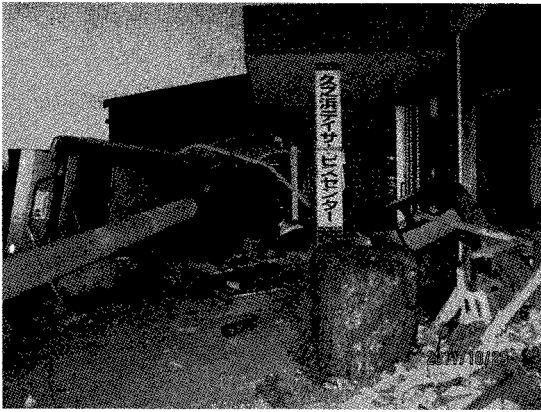


写真6 震災後のデイサービスセンター

りませんでした。写真を撮影した時間帯は、夕方
の4時半位でした。日暮れとともに暗くなりました
けれども、辺りに家を照らす明かりは、見えま
せんでした。しかし、津波に流された跡に家を建
てているところがありました。皆さんどうですか。
津波で流された後にもう一度家を建てる勇気など
ありますか。

私は、福島県東白川郡鮫川村というところにも
行きました。この方は村長さんです(写真7)。びっ
くりしました。会えたことに。当日の朝、鮫川村
を通るので急遽寄ってみたら会ってくれました。
その時にちょっとだけ義援金を納めさせていただ
きました。この鮫川村というところは、何もない
です。何がないかと言いますと、まずコンビニエ
ンスストアがありません。あるのは道の駅ひとつ
だけでした。ここにほとんどの生活用品が売られ
ていました。農産物も売られていました。この周
辺で測定された放射線量は、約0.2～0.3 μSv です。

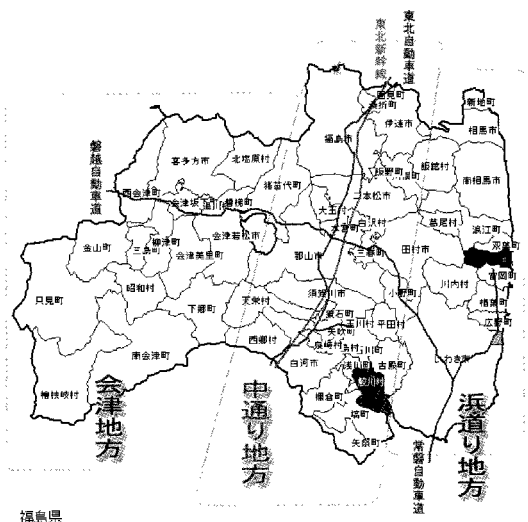


写真7 藤本氏と鮫川村長の大樂氏

福岡の約15倍ほどです。ここで私は食事をしま
したし、福島のお米も食べてきました。鮫川村は
約300万円で放射線量を測る機械を購入して、そ
れを通したものだけを売っています。

今、世界から見た日本はどのように思われてい
るのでしょうか。汚染された国と言われているか
もしれません。では、西日本からみた東北はどう
でしょうか。今、行きたい所ではないのではない
かと思います。私も実は、福島県に入ってわか
ったのですが、福島県って大変広いですね。原発
からは遠い県北でもいわゆる風評被害にあってい
るのです。私が行ったところは南です。原発から約
62.6kmのところのところに位置しています。そこでもや
はりきっちり放射線量を測って、大丈夫なものを
売っています。説明が遅れましたが、鮫川村はこ
こです(写真8)。先ほど見た津波の被災地はこ
こです。そして、原発がここです。このあたりの
車のナンバーは「いわきナンバー」です。現地
の方々から聞いた話なのですが、いわきナンバー
の車で、お出かけに行った家族がいたそうです。
あるレジャー施設に停めていて、帰ってきて、車
を見たらボロボロにされていたみたいです。いわ
ゆる「来るな」というような仕打ちを受けたので
す。そういうことを聞いているとショックでした。

今回私たちは色々なところに行かせていただき
ました。昔、私は自分のためだけに生きてきまし
た。プロゴルファーだったので、自分の結果さえ



福島県

写真8 福島県の地図

残せばいいと思っていました。しかし、レクリエーションと出会い、人の笑顔、子どもたちのために何かできないかということをはじめたことで、福島の支援に役立つことが出来ました。もし、このような震災が、今この大分に起きたらどうしますか。自分の町が絶望感に陥った時に、皆さんどういった気持ちになるのでしょうか。そういうことも気に掛けながら、皆様にも現地状況を見てもらいましたが、もしこれが自分たちの町だったらということで、今後の復興支援を皆様考えてほしいと思います。

風評被害に対して、地域の自治体が単独で色々な測定機械などを購入し、農産物を測定し、市場に流しています。それらはたぶん大丈夫だという科学的判断や国からの基準があるのでしょうか。これからは、皆さん自分自身で購入などの支援の方法を決定することを考えながら、今後の人生を送ってほしいと思います。

3. 地域復興・再生と人間力(人間関係力)

一雲仙普賢岳被災の経験から一(江川雅也)

長崎の南島原市深江町から来ました江川雅也と言います。日頃は、南島原市社会福祉協議会深江消防で勤務してまして、深江地区のみなさんが安心して暮らせる町づくりを目指して、日々仕事に励んでおります。夕方になると地域の子もたちにサッカーを通して、地域がもっと元気になればと思いつつ日々過ごしております。

先ほど司会者の方から、「雲仙普賢岳の噴火災害の経験から」というテーマで話すと言われました。1991(平成3)年6月3日に、雲仙普賢岳の大火砕流が発生しました。発生した時に自分は高校生でした。高校3年生で、国見高校のサッカー部員でした。長崎県の高校総合体育大会がちょうど行われている時でした。試合が終わって帰宅する際、恩師の小峰監督から、「お前帰れないよ。今島原がすごいことになっている」と聞きました。まずハッと思ったのが「おやじ大丈夫かなあ、おふくろ大丈夫かなあ」ということです。自分は2人兄弟なのですが、姉はもう高校を卒業して大学に行っていましたので、大丈夫です。本当に「おやじとおふくろ大丈夫かなあ」と気になりました。家には帰れなかったため、サッカー部の

寮で過ごすことになりました。親とやっと連絡が取れたのは1週間後ぐらいでした。

1週間してやっと親が寮に来てくれました。それまでは本当に全然連絡が取れなくて、学校や練習どころではないという状態でした。親と連絡が取れ、親自体は1カ月ぐらいで避難解除になった家に戻って日常生活が送れるようになりました。しかし自分は、火災流・土石流が発生したために、水無川が通れないということで、自宅から国見高校まで通えず、卒業まで寮でお世話になりました。

インターハイが終わって全国の切符をとりました。年が明けると全国高校サッカー選手権大会というメインイベントがありました。そのときに全国の人が色々な意味で支援をしてくださいました。高校3年間の集大成という想いに加え、全国サッカー選手権大会で地域に元気を継ぐのだという想いでした。小峰監督も、地域のみなさんの元気の1つ、起爆剤になればいいと言っていました。我々高校生全員とサッカー部全員と、地域の方々と一緒にしながら全国大会に臨みました。

深江町の方々には、大会に行く前にぜひ町内に元気をということで、優勝して来いという応援を頂きました。結果は惜しくも全国3位だったのですが、帰ってきたら、すごくみなさんが温かく迎え入れてくれ、「お前らすごいよ」、「元気をもらった」と言っていました。

自分は地元に残って就職し、最初はいろいろ遊んでいましたが、ある親からは是非サッカーを子どもに教えてほしいと言われました。それが、たまたま大野木場小学校という大火砕流で燃えた学校の保護者の方でした。仮設グラウンドで今生活している子どもたちにサッカーを教えてほしいと言われたのです。自分は高校時代に地域の色々な方々に支えていただいて、元気をもらっていたので、今度は私が地域貢献をしないといけないと思いました。せっかくみんなから元気をもらったのだから、今度は私が返す番ではないかということで、地域の子もたちにサッカーを教えに行きました。

最初は、グラウンドも狭く、仮設校舎の中も暗いというイメージがありました。仮設校舎や仮設住宅の中にならざる子もいましたし、なかなか

心を開かない子もいました。でも、だんだん時間が経つと、「コーチ、サッカーおもしろい」と言う子どもも出てきました。自分もとにかくサッカーをすることだけに集中しました。子どもと一緒にサッカーをやり、ボールと一緒に追いかけるなかで、子どもたちもだんだんコーチと一緒にサッカーを楽しんでくれるようになりました。

大野木場小学校が新設されるまでの、たった2年間だったのですが、仮設校舎と仮設グラウンドで練習させてもらって、「子どもたちはすごく伸び伸びとやってくれたなあ」と感じます。そして、今その時に教えた子が、私と一緒に自分のチームでコーチをやってくれています。あの時にコーチからサッカーを教えてもらったので、自分も地元に残るし、地域の人たちに恩返しをしたいと言うのです。「自分が出来ることは何かないかなあ」と考え、「自分もサッカーを通して子どもたちを元気にする、子どもたちの力になりたい」ということを聞いた時は、すごく「ああ嬉しかったなあ」と思いましたし、そうやって教えた子が地元に残って自分と一緒にサッカーを教えてくれるというのは涙が出る想いでいっぱい、今は一緒に協力しあって子どもたちにサッカーを教えています。サッカーを通して、子どもたちがチーム力、それ以外にもサッカー以外の生活の面で良い団結力を育み、地域の起爆剤になってくれたりしたらいいなと思っています。

仕事の方では、今の子どもたちは雲仙普賢岳の災害を知らないので、毎年夏休みに防災探検隊というものを行っています。防災探検隊で、地域の方々にインタビューしたり、雲仙普賢岳のことを地域の人たちに話を聞いたりして、それをマップにまとめて、自分たちなりに発表させています。そういう授業を社会福祉協議会でやっているのですが、たくさん子どもたちが参加してくれます。今年で、雲仙が噴火してから20年が経過します。ある小学校の先生、校長先生たちにも力を入れていただいて、今年は6年生が50人参加してくれて、マップを作成し、それをみなさんに発表する場をセッティングさせていただきました。

自分の子どもも5年生になりました。登校する時に、ちょうど学校の裏側に雲仙普賢岳が見えます。今うちの子どもたちが通っている学校は、校

門を上がっていくと、山が見えます。そして山に対して毎朝「おはようございます」と言っているのです。帰る時も山に向かって「さようなら」と言って帰るそうなのです。校長先生の「雲仙普賢岳があつての地域なのだ」と子どもたちに伝えていくべきだという趣旨からです。子どもたちはいつも山に向かってあいさつをしていました

東日本大震災があつて、自分も福島県に派遣され、いわき市の社会福祉協議会でボランティアセンターの手伝いを1週間だけさせてもらいました。自分たちも雲仙普賢岳の噴火災害を体験しているので、少しでも恩返しをしたいという想いでした。たった1週間だったのですが、人と人の繋がり、協力していただいた恩を、我々は今でも忘れられません。これから先、子どもたちにも、雲仙普賢岳のことを伝えていながら、災害に強い町を目指さなければいけないと思います。仕事の面でもスポーツの面でも、自分が今まで経験したことをずっと伝えていながらですね。色々な人々と関わりながらやっていきたいと思っています。

4. 地域における助け合い(共助)とレクリエーションの役割(上野祥子)

熊本から参りました上野と申します、よろしくお願ひします。こういう席でお話するのはとてもドキドキするのですがよろしくお願ひいたします。このような機会を設けていただいてありがとうございます。発表の場を与えていただくということで、あらためて地域における助け合いやレクリエーション協会の役割を感じて、勉強させていただきました(写真9)。



写真9 上野氏の講演

まず、私とレクリエーション協会との関わりについて少しお話しさせていただけたらと思います。実は私は熊本県人ではなく、福岡県北九州で生まれ育ちました。北九州は山あり海ありと、とても環境が良いところで、小学校に行くころには、地域の子どもは周りの子どもをいっぱい集めて海や山に休み時間ごとに遊びにいきます。我が家は特に遊びに行くのが大好きな家族で、大きな車をそのために買ったくらいでした。長女が小学校に入学すると同時に、転勤で熊本の主人の実家に移りました。植木町です。熊本県の北側で、福岡県に近いところ。スイカとビニールハウス、それと西南の役の田原坂で有名です。この写真は(写真10)「弾痕の家」といいます。ピストルの弾がたくさんあたって、家がこんな形になるほど戦争が激しかったことを表している所です。スイカもおいしいです。植木のスイカはとてもあまくておいしいです。スイカが育つのは1月ぐらいからで、ビニールハウスの中で苗を定着させます。熊本に来て一番すごかったのは、雨が来るのがわかることです。パラパラパラという音がビニールハウスを伝ってきます。自分のところに雨が降るよという音が近づいてくるのを最初に感じたときには「わあ！スゴイ！」と思いました。

私がレクリエーションに目覚めたのは娘の小学校1年生の授業参観でした。幼稚園や保育園から上がったばかりの子どもたちですから、授業が始まってもおとなしく席につくということはなく、パタパタパタパタやっていました。その時に先生が「始めるよ！」とおっしゃりました。そうしたら子どもたちは、自分の席の椅子の上に立っ



写真10 弾痕の家

て手を大きくあげたのです。そして、先生の合図を待つわけです。そしたら先生が「最初はグー！」と始めます。じゃんけんで勝ったらそのままいるのですが、負けたら席に座ります。子どもたちが負けて座った時には、ちゃんとおとなしく待っています。なぜこの騒がしかった子たちがちゃんとおとなしく出来るのかなって、その光景を見たときにどうしても理由を知りたくて、レクリエーションのインストラクターの養成講座に行きました。本当に、もうすごい光景だと思ったので、その先生が使ったのはどんなマジックかっていうのを本当に知りたくて行きました。レクリエーションは本当に奥が深く、幅が広いとその時に感じました。

その後、自分が活動していくわけですが、レクリエーションをやることで地域やコープの婦人会の役員、PTA役員、体育指導委員など、役員をやりたいという攻撃を受けるようになり、役員が回ってきました。ちょうどコープの婦人会の役員だったころに、熊本県のレクリエーション協会が阿蘇青少年交流の家でレクリエーションの研修会を行っていました。それで私の婦人会の仲間、十数人で一緒に行きました。本当に楽しい1泊2日でした。楽しかったねと言いながら帰っている車の中で、ひとりの方が「へー、こがん(こんなに)楽しいことしとったら、うちの子はあんなにならんかったかもしれん」と言われたのです。「なんで？」と思ったのですが、そこには深い意味があったのです。そのお母さんはお仕事でとても忙しいので、どうしても家に帰った時にちゃんと子どもたちと向かい合ってお話することができなかつたのです。自分の気持ちを切り替えて、子どもへと移すことができなかつたということでした。

最近、体育指導委員の研修会で、ただ運動するだけというわけではなく、もっと楽しく運動ができないだろうか、相談を受けることがあります。チームワークを作るといったときには、レクリエーション的な要素もいっぱいできます。そういったことをお伝えしています。

また、レクリエーションを初めて10年くらいのときに、「レクリエーション協会を立ち上げてみませんか」と、県のレクリエーション協会からお話をいただきました。地域でレクリエーション

協会をつくるとなると、やはり自分の住んでいる地域を見直すということが必要です。まずは自分の見直し、それから地域環境の見直し、将来の夢、そして大切な仲間がいるのかどうかなど、様々なことを考えました。そして決心してレクリエーション協会を立ち上げました。ちょうど10年前です。まずは5年間の目標を立てようかと言っていたのですが、そんなうまくはいきませんでした。それでも、会長、副会長、理事長、専務理事、理事局長、監査、理事、と36名で立ち上げることができました。自分自身のキーワードとして、“広げる”“伝える”を掲げています。大きく目を開ける、情報をキャッチする、現状に妥協しない、あきらめない、当たって砕けろの心、愛するというキーワードを持ちながら、2002（平成14）年6月にレクリエーション協会を立ち上げました。その年の8月、ここの地域で特に必要となっているものは何かと考えたときに福祉だと思い、福祉に関係することも始めました。レクリエーションインストラクターの養成講座です。あともう1つ、レクリエーション協会の立ち上げと同時に福祉レクリエーションセミナーも行いました。今10年目になります。

人と人とがコミュニケーションをとるためには、私たちと参加者との距離が縮まる必要があると思います。焦る必要はないですが、相手との関係によって、時間をかければ大切な距離、適切な距離に近づけると 생각합니다。そして、人と人との間の距離のとりかたは、相手との関係によって大きく変わると、アメリカの学者が言っています。360cm以上は個人的な関係が生じにくい距離で、結構離れた距離です。120～360cmまでは、仕事や知り合いという程度で適当な距離です。これは「社会的な距離」とも言われています。45～120cmは、無意識のうちに体か触れ、接触しても大丈夫な間柄での距離で、親密な関係です。45cm以下はもっと親密な関係で、親子とか恋人同士と言われています。

レクリエーションを行っている、「この距離が大切だ」と、「個人的な距離に近づけるようになる必要があるのだ」と思います。地域のコーディネーターは、参加者と適当な距離に近づけるようになることがコミュニケーションを成立させるた

めの1つの目安となるのではないのでしょうか。おそらく、最大公約数的に、個人的距離ないしは、適当な距離に近づくには、お見合いの仲人ではありませんが、皆さんの仲をつなげる仲人になる必要があるのかなと思います。小さくても大きくても満足していただける距離、これが大切だと思います。

私たちはレクリエーション協会の充実させるために、地元の小学校へのアプローチも行っていきます。日本レクリエーション協会が推奨していただいた「遊びの指導」という事業をきっかけに、アプローチをどんどん広くして、今は小学校に行っているのです。学校の先生方がちょっと苦手かなという器械体操を、総合型地域スポーツクラブからの指導者派遣というかたちで、レクリエーション協会もからみながら事業をしています。また、いきいきサロンの認知症予防のレクリエーションの必要性を扱いたいということで、最初はボランティアで行い、後に介護福祉の予防の予算をいただいて派遣事業も行いました。それから障害者のニュースポーツについても、色々な福祉施設に向いてやっています。どうしても施設の中にと肥満になりやすいので、太極重力球というスポーツを紹介しています。それから、体育指導委員という私の役目から、体育指導委員の女子部の研修の中にレクリエーション活動をたくさん盛り込んでいます。

これは、今年で10年目を迎えるレクリエーションインストラクターの養成講座の一場面です（写真11）。私もたくさんの感動をいただいています。この中に白髪交じりの男性、70歳半ばの方がいます。この方の補聴器は特殊な補聴器で周波数によって音が分かるそうです。卒業式の日までよく分からなかったのですが、この補聴器を外すと「僕の中は全く無音です。でもここに来るたびに皆さん方の笑顔とやさしい接し方に毎回、帰るときにあったかい気持ちになって帰ります」と教えてくれました。本当は心の中に大変色々な悩みを持っていらっしゃる方がいたのです。最後には「これが終わるのは辛い。もっともっと来たい。毎週毎週木曜日、次から僕は何をしたらいいんだ」とおっしゃっていただきました。今年で卒業生は315人を数えます。



写真11 レクリエーションインストラクター養成事業の様子

福祉レクリエーションセミナーは10回目を迎えました。これは毎年人気をいただき、鹿児島からもマイクロバスを1台チャーターして毎年駆けつけてくださいます。ご協力いただいた佐藤靖典先生に加えて山崎律子先生（余暇問題研究所）も会場にいらっしゃって本当にびっくりしたのですが、こういった素晴らしい先生方をお迎えして、地域に「福祉とは何か？」ということを伝えたいと思っています。

最後です。贅沢にも今年フランスに行ってきました。その時に、ステンドグラスがあまりにきれいで、これを見たときに感動しました。色とりどりの光の中、これを見ているときにレクリエーションのみんなのことを思い出しました。みんなが光っている、その光ってすごい。それぞれの性格や、色々な生活の中で作り出す光だと思うのですが、この光が集まったところ、この大きな光の輪をつくるのが、レクリエーション協会、私たちの役目なのかなと思います。それを想ってこの写真を撮ってきました（写真12）。そして、地域に根差すもの、今福島や雲仙普賢岳のお話をいただきましたが、ちゃんと地域のことをきちっと知らなくてはいけない、子どもたちを中心にして考えた地域で大人たちも、みんな仲間・近所付き合いができるような地域でなければいけないなど。またその距離を縮めていくのがレクリエーションにかかわっている私たちではないかなと思っています。どうもありがとうございました。

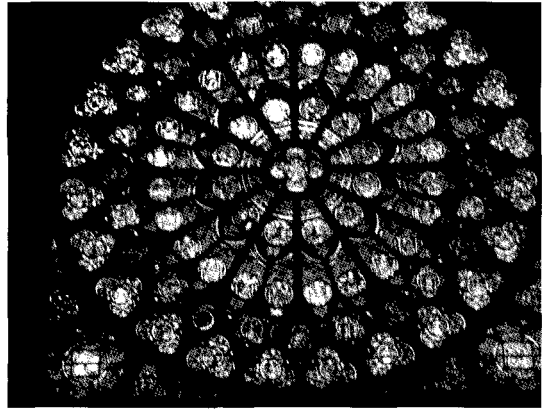


写真12 ステンドグラス

<ディスカッション>

谷口：1つだけお尋ねします。江川さん子どもの時、高校生の時に見ていた恐い普賢岳…今その普賢岳は、どんなふう江川さんの心に映っているのでしょうか？

江川：そうですね。あの…自分たちはですね、火砕流が頻繁にあったことが、今でも自分の頭から離れないのです。実際に今も地元の方は「山を見ると火砕流や土石流のイメージしかないな、そういうこと思いだす」とよく言われます。また自分たちも、火砕流が起きた、土石流が発生したということを目に焼き付けてしまっているの、山は、やっぱり我々にとっては直視しにくいという印象ですね。

谷口：そういう中で子どもたちが毎日、山に向かってあいさつをしていると言うのはいいお話だなと思いました。その様子子どもたちに触れる中で、東北の方が、次の世代の子どもたちが、今後海をどうやって見るのかかがすごく大切だと思ってのですが、いかがですか。

江川氏：そうですね、やっぱり「いつ災害が起きるかわからない」、「200年前に噴火し、今回噴火したから、また200年後に噴火するだろう」という考え方では良くないと思います。いつまた山が噴火して火砕流がおき、土石流が発生するのかわからない状況なのです。やはり子どもたちには、いつこういう災害が起きるかわからないよ、200年後ではないよ、と伝えていくようにしなければいけません。山に向かって礼をしていると子どもたちからの話を聞いて感じたのは、深江町が雲仙

普賢岳の災害を受けた町だということを、子どもたちに忘れて欲しくない、いつ災害がおきるかわからないというのを意識しながらですね、過ごしてほしいなって思います。

谷口：上野さんのお話の中で、距離感のお話が出てきました。レクリエーションはその個人的な距離を近づけていく力があるのかもしれないという話をいただきました。そこで、実際に福島に行かれた藤本さんにお尋ねします。福島でレクリエーション活動、レクリエーション支援活動を展開する中で、子どもたちをはじめとする福島の方々の中で、その距離感は縮まりを見せましたでしょうか。例えば、子ども同士、人間同士で…。

藤本：笑顔がなくなっている子どもたちだったのです、初めて会ったときには。そのため、私たちが来ることで、何か始まるのだという、わくわくドキドキをもう1度子どもたちに感じてもらうことから始めました。私たち7人がそろって1つのプログラムを1時間半やりました。最後のほうで、子どもたちに、キーキー、キャーキャーという賑やかな声が戻った時には、以前の子どもの距離に戻れるということを確認しました。それから先は現在進行形で、今はもっと距離は縮まっているのではないかと思います。

谷口：ありがとうございます。これから佐藤先生にコメントを頂くにあたって、私からリクエストがあります。上野さんにも後ほどコメントをいただきたいのですが、「地域がちゃんと地域のことをやらなくてははいけない」こと、つまり地域の住民の意識をつくっていくことがレクリエーションの1つの働きかけなのかもしれないという捉え方を私はしました。

一方で、東日本の被災地においては、自分の住んでいた地域から離れざるを得ない方が事実いらっしゃるわけです。また、地域に残っていないながらも、仲の良かった地域の仲間が周りからいなくなっているという中で、地域の人と人とのつながり、人の絆みたいなものが、実は強制的に無くなってしまっているような事態が事実あるわけですね。その様なときに、レクリエーションの立場から、どの様な働きかけが可能なのかを伺いたと思います。とっても難しいご質問ですが、佐藤先生に聞いてみようと思います。

佐藤靖典（コメンテーター）：(大会の開会挨拶で)柳井大分大学教育福祉学部長が問いかけた「我々（レジャーレクリエーション学会）にできることは何なのか？」に対する1つの答えは、「心を支えること」でしょう。レクリエーションというのは物質的な支えではありませんよね。どちらかというと、心を支えていくというほうに主力を置く…置かざるを得ないと思います。笑わせてくれる、楽しませてくれること自体が生きていることです。今レクリエーションに求められているものはこういうことなのかと思います。

今、3人の発表を聞いて、藤本さんの場合は、藤本さん自身がプロゴルファーになり損ねた後にレクリエーションと出会って、社会参加している事業に今こんなに生きがいを感じています。まさに人間が180度変わりました。自分のために生きていた人が、人のために生きる人に変える力をレクリエーションは持っていると感じました。

江川さんは自分が支えられたから今度は支える立場になって、少しでも自分たちが経験したことを後の人たちに伝えていこうと努力しているし、そのキーワードとしてサッカーというスポーツがあります。楽しみですよ、サッカー。すばらしい遊びだと思います。

そして上野さんは何よりも地域に根差していますよね。地域の顔が見えていますよね。みなさんは住んでいる地域の顔が見えますか？私は「絆」ってサツというのは嘘っぽいなという気がしています。やっぱり日ごろの付き合いの延長線でしか「絆」ってありえないのかなど。強制的につくっていければ別ですけどね。本来、日常生活の延長線上にあるものです。では何が「絆」のテーマになるのかと言うと、1つやはり「楽しい」っていうことと、もう1つは「身近な課題」ですね。上野さんの、小さな課題、身近な課題、仲間が持っている課題をひとつひとつクリアするために新しい事業をクリエイティブしていくという姿そのものが、レクリエーションではないかなと私は思っています。

谷口先生が言った非日常性と日常性の回復ということでは、まさに非日常ですね。レクリエーションも、遊びも、スポーツも。無くたって人間は生きていけるわけです。ガーデニングをしたり、家

に花を飾っている人はいますか？（数名手しか手が上がらなかつたため）貧しい生活をしてますね。人間らしくないですね。花は飾らなくても生きていけます。何で花飾るのですか？それは我々がやっぱり心豊かに過ごしたいって思うものがあるからではないかと思います。レクリエーションというバカにする人がいっぱいいます。バカにする人に何ていいますか、みなさん？「寂しい人生ですね」って言ってあげてください。価値を何に置くのかというとき、今、ブータンの国王ご夫妻が日本に来ていますが、幸福度を価値基準に置くべきだということ、わかっている日本人はなかなか納得できませんよね。でも、確かにレクリエーションで子どもの笑顔が生まれ、地域の人がいきいきしだし、出来ることで支えあっていこうとします。そんな力を、私は「レクリエーション力」と呼んでいるのです。レクリエーションには人間をも再生する力がある、あるいは地域を元気にする力がある、そういった力をもっともっと実践の現場でやっていくしかないのかなと思っています。

身近な生活課題を楽しみながら取り組んでいくことが、まさにレクリエーション活動だろうと思うわけです。その延長線上に今回のような福島に行くという活動もあったと思うのです。私は火砕流が起きた時ライブで見ました。大火砕流が、街を飲み込んでいく姿をライブで見たのは、あれが最初です。そして今回、津波が街を飲み込んでいく、人々のありとあらゆるものを根こそぎ持って行くのも見ました。その間に9.11のテロがあったわけですよ。こういうのをライブで見ながら、我々は当事者になりえない、あれはよそで起こっていることだ、かわいそうだ、大変だって思います。しかし、そこにはやむを得ず服した人が確実にいるのです。そういった人を、私たちが支えていくことになるのかなぁと思っています。

「根こそぎ持って行かれた」という言葉が私には一番印象に残っています。先ほど言ったように人と人とのつながりが大切だとわかっていきます。その人と人とのつながりさえも、今回の震災では根こそぎ持って行かれたのです。ではどうするかというと、再生しかありません。自分たちが創り上げていくしかない。無くなったものを嘆

ている暇があったら、創りだすことを考えましょう。それがレクリエーション的です。とても大変なことかもしれません。でも1945（昭和20）年に太平洋戦争に負けてから、わずか19年で日本という国は世界最速の新幹線を走らせ、東京オリンピックを見事に成功させました。わずか19年です。これが日本人の力だし、街を、地域を、人間を、この国を再生していこうという思いの力だと思うのです。それは響きあう心。みんながひたむきに、ひたすらに、自分ができること、自分の可能性を駆使して社会と関わってきたことが街をつくっていったと思うのです。そう考えると、根こそぎ持って行かれたことを嘆いていても帰ってこない。ではどう創っていくか。まさに学会の先生方の力を借りながら人間性再生、人間関係づくりのために、我々はどういうことができるのかということをごういった学会で論議していただければありがたいと思います。

1929（昭和4）年に世界大恐慌がおき、世界中が不況になりました。その時に皆さん方がご存じのアメリカのルーズベルト大統領が何やったかというニューディール政策です。新しい政策を立てて、雇用を創出しました。1つはスポーツ施設をたくさんつくって、そこに若者を雇うという策を打ち出しました。もう1つはワークシェアリングですね。1人の人が働くところを少し分かち合って、1人ひとりの働き量を減らして働く人を増やそうとしたのです。働くイコール生活の基盤ができるということです。これが我々にとって一番の希望です。聴衆に学生諸君もたくさんいますが、大学で勉強して後に何があるかということ、安心して思いっきり働ける場所があるのです。給料は少し安いかもしれませんが、希望を求めることができると思います。シェアリング、分かち合い…そして新しい困難な時期を乗り越えていく創造力、その様なことが今我々に求められているのではないかと思います。

私はレクリエーションをバカにする、見下す人が好きです。谷口先生もそうでした。「こいつをどうするんだ？」これほど創造的なことはありませんよね。自分に反抗する人を身方に引きつけていく、これほど創造的、クリエイティブな仕事はないですね。私が、最もレクリエーション的な活

動を体験させていただいたのは谷口先生です。そういう意味でいえば、わたしは地域で色々な活動をしていますけれど、レクリエーションは人々を元気にする、笑顔にする力を持っていると確信しています。それを上野さんは現実に行っている。それを上野さんは現実に行っている。藤本さんたちはわずかな時間だけでも、福島に頑張って行ってそれを体験してきました。そして江川さんは自分が支援される側から支援する側にまわって、地域の子どもたちを、スポーツを通して元気にしました。皆さん方が活動を本気になってできることをやってくれば、1つずつ小さなことが変わっていきます。その小さなことが変わりだしたことを1つの糧にしてやっていくのがこういう学会であり、レクリエーション協会の仕事かなと思います。そういうための活動を、今後ともレクリエーション協会の指導員としてやっていこうと思っています。ありがとうございました。

谷口：簡単にパネルディスカッションをまとめさせていただきます。3名のパネラー、そしてコメントーターの佐藤先生のお話をうかがう中で、レクリエーションの今日的な役割を再認識できたような気がしています。すなわち、レクリエーションとは、「人と人とがつながりあっていくこと」によって得られることになります。私たち自らの中での「気づき」にはほかならないのでしょうか。

このたびの震災に対峙する中で、私たちは「人と人とのつながり」を多分に意識することになりました。そのことは、「支え、支えられ」ること

にほかなりません。私たちは支えてもらうことに感謝します。しかし、支えるという行為のなかでも感謝するのです。もしかしたら、レクリエーションとは、「ありがとう」の気持ちを共有することなのかもしれません。

最後に、私が大分大学で開講している「レクリエーション概論」の中で学生が記してくれたコメントを紹介させていただきます。教育福祉科学部の1年生女子のコメントです。「Re-create、再創造というのは、より上を目指すことなんだと思いました。そして、より人びとを楽しませる、幸せにすることなんだと感じました。身のまわりにあるさまざまなサービスは、私たちをより快適で幸せにするようにと、サービスを与える側が常に気を配ってくれているおかげだと思いました」。

この授業で僕はおおいにリ・クリエートされています。「教えることは学ぶことに通ずる」という言葉があります。先ほど申しました、「支えることと支えられること」の意味に通じていると思っています。私たちは、いままさに、苦難に直面している状況の中で、レクリエーション・マインドを大切にしたいと考えます。そしてまた、本学会としては、レジャー、そしてレクリエーションの意味と役割をおおいに発信していかなければならないでしょう。

ご登壇いただきましたパネラー、そしてコメントーターの先生方に大きな拍手をお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

